

## 平成 28 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	28K21	氏名	藤巻 恵太
研究主題 —副主題—	小学校体育科における効果的なコンサルテーションの在り方 —つまずきの背景に着目して—		
派遣先	早稲田大学教職大学院	担当教官	岡田 芳廣
所属校	中央区立月島第一小学校	校長	三木 滋

キーワード：体育指導 悩み事の解決 コンサルテーション 協働関係 つまずきの背景

### 1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

体育科は、身体運動を伴うため「頭では分かっているけれどもできない」という教科特有の難しさがある。また、できない原因は人によって様々であり、指導法に関する文献は数多く存在するものの、それが目の前の学級の子に効果的かどうかは分からない。さらに、小学校教師はほとんどの教科を担当が行うため、体育科だけに目を向けられる状況にはない。このように日々の体育授業の悩みを担当教師一人で解決していくことは非常に困難といえよう。

加登本・松田・木原・岩田・徳永・林・村井・嘉数（2010）は、全教科を教える小学校において現職の教員が体育指導を行う上で、どのような悩みが生じているか調査した。その結果、「配慮を要する子のニーズに応えられる（ニーズ）」「授業中に一人一人の学びを把握する（把握）」「子供たちの運動のつまずきが診断できる（不得意）」「運動の苦手な子への配慮ができる（つまずき）」などを 50%前後の教師が困難と回答していることを示した。この結果から、学校現場においては、個別指導における問題意識が高いことが示唆された。さらに、それらの現状を踏まえ、加登本ら（2010）は小学校教師が体育授業を行っていく上での悩み事を低減するためにこれまでどのような解決方法をとってきたか、また、どのような解決方法を求めているのかを調査した。

その結果、現状・望みともに「校内の同僚の教師に相談する」が一番高い数値を示していることが分かった。つまり、多忙な小学校教師が体育授業に関する悩み事を解決するためには、体育指導に積極的に関与する立場になる教師が中心となり、学校内において専門的知識を共有していくことが有効な支援と考えられる。

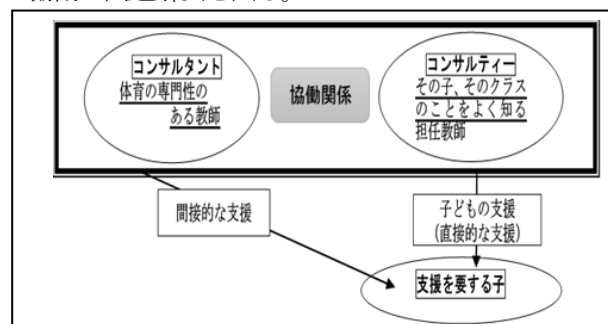
そこで、本実践では、体育授業においてコンサルテーションを行い、現場の教師の問題意識に寄り添い、協働で問題解決を図っていく。そして、体育授業の悩み事の解決を通して、現場の教師が体育指導に自信がもてるような効果的なコンサルテーションの在り方の検討を目的とする。

### 2 研究の内容・研究の方法

コンサルテーションの定義について、小林は以下のように定義している。（小林 2009）

「異なった専門性をもつ者同士の作戦会議。互いの専門性を尊重し、それぞれの立場から子供への対応を議論、検討する。互いの専門性から子供を見て、対応方法を一緒に考えるプロセスのこと。『縦』の『指導する』という関係ではなく、『横』の『協働関係』がコンサルテーションである。」

本実践では筆者がコンサルタントとなり、担任教師にコンサルテーションを行い、子供の対応方法について協働で問題解決を図る。



【Fig.1 コンサルテーションの関係図】

（※小林 2009 の関係図をもとに筆者作成）

#### 2-1 コンサルテーションの土台作り

単元が始まる前に、支援を要する子の実態把握シートを作成した。①体育の学習面全般について②体育の領域別について③その他の周辺情報について（学習面・生活面、対人関係面など）の三つの観点から聞き取りを行い、課題や強みを整理した。

#### 2-2 授業観察によるフィードバック

##### (i) 今やれている支援の価値付け

授業観察を通して、コンサルティが支援を要する子に対して今やれている支援を価値付けていくことを重点的に行った。そうすることで横の協働関係になるようにした。特に、運動が苦手な子の学習活動に及ぼす要因として、高橋（2000）によれば、①運動課題の難度、②学習集団、③教師の指導概念が挙げられている。子供のつまずきを先に検討するの

ではなく、まずは三つの観点を踏まえて、できている支援を積極的に価値付けて、フィードバックを行った。

(ii) つまずきの背景に着目したフィードバック

・自己省察を促すために (タブレットの活用)

体育の授業で担任教師は安全面に注意しながら全体に気を配って授業をするため、一人一人の詳細な実態把握は難しい。また、運動場面は一瞬で終わってしまうため、どこでつまずいているのか、どんな支援を必要としているかを瞬時に判断することは困難である。そこで、支援を要する子を継続的に観察するとともに毎時間タブレットで動画を記録し、フィードバックの材料とした。支援を要する子の様子を客観的に捉えることにより、つまずきの背景に着目した気付きを促すことができると考えた。

・問題の状況を整理するために (観察シートの活用)

観察シートを活用することで、子供がどこでつまずいているのかを精選し、本質的な問題を中心に省察することができると考えた。また、コンサルティーマのニーズに沿ってぶれずに支援できると考えた。

### 3 研究の結果

#### 3-1 アンケート結果から

	コンサルテーションの回数	体育指導に自信(4件法)		※問題状況(10段階評価) ⑩10課題 ①1少	
		事前	事後	事前	事後
A 教諭	6回	3	2	8	4
B 教諭	5回	3	3	10	2
C 教諭	5回	3	3	8	3
D 教諭	1回	2	2	8	6
E 教諭	9回	2	3	7	3
F 教諭	8回	2	3	7	3

「体育指導に自信がある」という数値が2名上昇した。また、問題状況の変容を見てみると、全コンサルティーマの課題状況が減少し、実習前が平均8だったのに対し、実習後は3.5に減少した。

#### 3-2 インタビュー調査から (E 教諭の変容)

A君がどうすれば喜ぶかなということを考えるようになった。最初はなかなか上手いかなかったけど、上手いかなかったからこそ、グルーピングや場の設定とかを変えてみようと思うようになった。そしたらいつしかA君基準で考えるようになった自分がいた。そうすると必然的に声掛けも多くなった。

→インタビューからコンサルテーションを通して、E教諭自らが、A君のつまずきに寄り添った支援の在り方を考えるようになったことが伺える。その結果、

A君も苦手な器械運動を最後までサジを投げずに、意欲的に取り組むことができたと推察される。

### 4 研究の考察

アンケート結果から、コンサルテーションに一定の成果があったといえる。実践を通してコンサルティーマの問題意識に寄り添い、協働で解決を図ったことにより、支援を要する子の意欲や技能に高まりが見られたことで問題状況の解決につながったと考えられる。また、コンサルテーションをしていく上で、まずコンサルティーマとの関係づくりが重要であることを改めて感じた。授業者は授業を観察されると、観察自体を負担に感じることも少なくない。コンサルタントは決して評価者ではなく、協働者であることを意識し、それを伝えていく必要性を感じた。そのためにも今やれていることの支援を価値付け、互いの専門性を尊重しながら協働関係を構築していくことも重要な役割だと感じた。

また、本実践においては、6名のコンサルティーマ全員が中堅教員で、学級状況が落ち着いており、個別の支援にも目を向けられる状況にあった。体育の指導に自信がないと感じている現場の教師は、支援を要する子に着目する前に、適切な学習規律の維持や子供相互の協力的な関係づくりなど体育の基礎的な指導内容に関する問題意識が見られ、個別の支援まで考えられる状況にないという側面も考えられる。

### 5 今後の展望

本実践は実習生という立場で時間をかけてコンサルテーションを実施できたが、多忙な学校現場で誰がどの時間を使って行っていくのか、コンサルタント側の専門的な力量をどう付けていくかということも課題として挙げられる。支援を要する子には、運動領域の特性からアプローチするだけでなく、本人の発達課題に着目したアプローチも不可欠である。運動に対する苦手意識の背景には、初期感覚(触覚・固有感覚・前庭感覚)が大きく影響している。このような特別支援教育の視点から更に体育の専門性を高め、体育における悩み事の解決に貢献できるようにしていきたい。

